

『躬恒集』注釈（八）

平沢竜介・大久保壽子・菊池聡子・世良梓・高須恭子・  
武知美樹・西村瑠美子・原口理恵・町田英美

344 延喜御時御屏風に  
神まつる卯月に咲ける卯の花を白くもきねのしらげたるかな

【他文献】

延喜御時月次御屏風に

みつね

神まつる卯月にさける卯の花はしろくもきねがしらげたるかな

（拾遺和歌集・卷二・夏・九一）

延喜御時月令御屏風に

躬恒

神まつる卯月にさけるうの花はしろくもきねのしらげたるかな

（拾遺和歌抄・卷二・夏・五九）

かみまつる卯月にさけるうの花をしろくもきねがしらげたるかな

（古今和歌六帖・第一・八三）

【語釈】

○詞書―へ内〱本は「延喜御時つきなみの御ひやうふに」。○神まつる卯月―神まつりは四月や十一月にするこ  
とが多い。○卯の花を―へ内〱本「うのはなは」。○白くも―へ禁〱本「しるくも」。へ御〱本「しまくも」。○  
きねの―「神に仕える人。巫女」などを意味する「きね」に「杵」を掛ける。へ禁〱へ御〱本「きねか」へ内〱  
本「きぬか」。○しらげたるかな―「しらぐ」は「玄米について白米にする。精米する」の意。

【通釈】

神様を祭る四月に咲いている卯の花を、神様を祭る巫女が杵で白く精米したことであるよ。  
▽卯の花の白く咲いている様を、巫女が杵で精米したようだと見なした歌。

【類歌・参考】

延喜御時月次御屏風に

つらゆき

かみまつるやどの卯の花白妙のみてぐらかとぞあやまたれける

(拾遺和歌集・卷二・夏・九二)

神まつるう月の花もさきにけり山ほととぎすゆふかけてなけ

(続千載和歌集・卷三・夏・二二四)

ちはやぶる春日の原にこきまぜて花ともみゆる神の袴部かな

(延喜二十一年京極御息所褒子歌合・一〇)

延長四年八月廿四日、民部卿清貫が六十賀中納言恒佐し侍りける時の屏風に、かぐらする所のうた

つらゆき

あしひきの山のさかきはときはなるかげにさかゆる神のきねかな

(拾遺和歌集・卷十・神楽歌・六一八)

345

山里に住む<sup>す</sup>しるしなし<sup>ほと、ぎす</sup>郭公<sup>こ</sup>まれ<sup>おも</sup>に來んとは思はざりしを

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○しるしなし―甲斐がない。効果がない。○まれに來ん―たまにしか來ないだろう。○思はざりしを―「を」は詠嘆を表す間投助詞。

【通釈】

山里に住む甲斐がない。ほととぎすがたまにしかやって來ないだろうとは思わなかったことよ。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

夏山になく郭公心あらば物思ふ我に声なきかせそ

(題しらず)

(よみ人しらず)

(古今和歌集・卷三・夏・一四五)

あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのぞみなく

(古今和歌集・卷三・夏・一五〇)

敦忠朝臣の家の屏風に

源公忠朝臣

このさとにいかなる人かいへゐして山郭公たえずきくらむ

(拾遺和歌集・卷二・夏・一〇七)

延喜御時中宮歌合

よみ人しらず

なつくれば深草山の郭公なくこゑしげくなりまさるなり

(拾遺和歌集・卷二・夏・一二三)

346

我聞<sup>き</sup>て人には告<sup>つ</sup>げん郭公<sup>ほと、ぎすおも</sup>思<sup>おも</sup>ひのほか<sup>な</sup>に鳴<sup>な</sup>かば憂<sup>う</sup>からむ

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○人には告げん—人に知らせよう。○思ひのほか—「意外にも」の意を表す「思ひのほか」に「外の場所」の意を表す「外」を掛ける。

## 【通釈】

私が聞いてもうほととぎすが鳴いたと他の人に知らせよう。ほととぎすが意外にも外の場所で鳴いたら辛いことだろう。

## 【類歌・参考】

延喜御時御屏風に

つらゆき

山ざとにする人もがな郭公なきぬときかばつげにくるがに

(拾遺和歌集・卷二・夏・九八)

寛和二年内裏歌合に

右大将道綱母

宮こ人ねでまつらめや郭公今ぞ山べをなきていつなる

(拾遺和歌集・卷二・夏・一〇二)

女四のみこの家歌合に

坂上是則

山がつと人はいへども郭公まづはつこゑは我のみぞきく

(拾遺和歌集・卷二・夏・一〇三)

題しらず

(よみ人しらず)

まつ人は誰ならなくにほととぎす思ひの外になかばうからん

(後撰和歌集・卷四・夏・一六四)

347

撫子なでしこの花咲さきにけりわぎもこ吾妹子こひが恋こひしき時のよき形見草かたみ

## 【他出文献】

家集

みつね

なでしこの花咲きにけり亡き人の恋しき時のよきかたみ草

(夫木和歌抄・卷九・夏三・三四六三)

## 【語釈】

○撫子の花―「撫子」に「撫でし子」を掛ける。○吾妹子―私の愛しい女性。○形見草―「形見草」に「形見種」を掛ける。

## 【通釈】

撫子の花が咲いたことよ。私の愛しい人が恋しい時のよい形見のたねとなる草であることだ。

▽「撫子」が「撫でし子」を連想させることから「撫子」を「吾妹子」の形見と見た歌。

## 【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

あなこひし今も見てしか山がつかきほにさける山となでしこ

(古今和歌集・卷十四・恋四・六九五)

わすれにける女を思ひいでてつかはしけるよみ人しらず

打返し見まくぞほしき故郷のやまとなでしこ色やかはれる

(後撰和歌集・卷十二・恋四・七九六)

天曆御時、ひろはたの宮す所ひさしくまゐらざりければ、御ふみつかはしけるに

御製

山がつかきほにおふるなでしこに思ひよそへぬ時のまぞなき

(拾遺和歌集・卷十三・恋三・八三〇)

伊勢のみゆきにまかりとまりて

人まろ

おふの海にふなのりすらんわぎもこがあかものすそにしほみつらんか

(拾遺和歌集・卷八・雑上・四九三)

題しらず

人まろ

わぎもこがあかもぬらしてうゑし田をかりてをさめむくらなしのはま

(拾遺和歌集・卷十七・雑秋・一一二三)

(348、349は〈西〉本に重出)

350

糸いとならぬ声こゑ繕より合あはせて郭公(おもむ)もの思われ我ねと音なをぞ鳴なくらし

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○声こゑ繕より合あはせて―「様々な声を糸のように繕り合わせて」の意か。

## 【通釈】

糸ではない様々な声を糸のように縊り合わせて、郭公がもの思いをしているのは私だと声に出して鳴いているらしい。

## 【類歌・参考】

このきさいの宮つねにあつしくおはしましけるを、つゐに六月八日そなくならせたまひにける、あさましくいらなくなしく、つかうまつりし人さなからあつまりてなきわふるに、のちくのわさのいそきにやうくくなりぬ、あめいたくふるひ、このみをこゝろうしといひし人はさうしになむをりける、うへの人くあつまりて、御わさのくみのいとをなむよりける、しもなる人、いとはよりいてたまへりやと、いまはなにわさをかしたまふ、といひたれば、あめをなかめてなむ、とそいひあひたりける、うへのこたちのかへりことに、いとはよりはてていまはねなんよりあはせてなきはへる、といへりければ、しもなる人よりあはせてなくらんこゑをいとにしてわかなみたをはたまにぬかなむ

(伊勢集I・四八三)

題しらず

凡河内躬恒

青柳の花田のいとをよりあはせてたえずもなくか鶯のこゑ

(拾遺和歌集・卷一・春・三四)

351

古里ふるさとは見しみごとともあらずな郭公な鳴くね音をき聞くむかしは昔むかしなりける



【他出文献】

ナシ

【語釈】

○見しごとくもあらず―以前見たようではない。 ○聞くは―〈禁〉〈御〉本「きくそ」。

【通釈】

古里は以前とはすっかり変わってしまった。郭公の鳴く声を聞くと昔のまままだ。

【類歌・参考】

はつせにまうづるごとにやどりける人の家にひさしくやどらで、ほどへてのちにいたれりければ、かの家あるじかくさだかになむやどりはあるといひいだして侍りければ、そこにたてりけるむめの花ををりてよめる

つらゆき

人はいさ心もしらずふるさとは花ぞ昔のかににほひける

(古今和歌集・卷一・春上・四二)

さくらの花のもとにて年のおいぬることをなげきてよめる

きのともものり

いろもかもおなじむかしにさくらめど年ふる人ぞあらたまりける

(古今和歌集・卷一・春上・五七)

ならのみかどの御うた

ふるさととなりにならのみやこにも色はかはらず花はさきけり

(古今和歌集・卷二・春下・九〇)

352

古里ふると人は言いへども郭ほと、ぎすな公鳴ねく音ねを聞きけばめづらしきかな

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○古里―旧都。かつて住んでいた土地。生まれ故郷。

【通釈】

古里と人は言うけれども、郭公の鳴く声を聞くと新鮮に感じられることだ。

▽「古里」を文字通り「古い里」の意にとつて、古い里ではあるが、そこに鳴く郭公の声は新しいと言ったのだらう。

【類歌・参考】

ふるさとは見しこともあらず郭公なくねをきくはむかしなりける  
あたらしくてる月かけにほとときすふるこゑしるくなきわたるなり

(躬恒集 I・三五二)  
(躬恒集 IV・一一〇)

353

今日暮れて明日になりなば撫子の花をや夏のかたみとは見む

## 【他出文献】

ナシ

## 【語釈】

○明日になりなば―底本は「あすきなりなは」。〈禁〉〈御〉本によつて校訂する。○撫子―山野に自生するナデシコ科の多年生草本。夏から秋にかけて淡紅色の花を咲かせる。秋の七草の一つとされるが、ここでは夏を代表する花として詠まれる。○花をや―底本は「花おや」。〈禁〉〈御〉本によつて校訂する。

## 【通釈】

今日が暮れて明日になったら、撫子の花を夏の形見と見るだろうか。

▽六月晦日に詠んだ歌。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人も

なでしこの花ちりがたになりけりわがまつ秋ぞちかくなるらし

(後撰和歌集・卷四・夏・二〇四)

松下納涼といへる心をよみ侍りける

中務卿具平親王

とこ夏のはなもわすれて秋かぜを松のかげにてけふは暮れぬる

(千載和歌集・卷三・夏・二〇七)

354

かくばかり惜<sup>お</sup>しみつる夜をいたづらに寝<sup>ね</sup>で明<sup>あ</sup>かすらん人さへぞ憂<sup>う</sup>き

【他出文献】

かむなりのつぼに人人あつまりて秋のよをしむ歌よみけるついでによめる

みつね

かくばかりをしと思ふ夜をいたづらにねてあかすらむ人さへぞうき

(古今和歌集・卷四・秋上・一九〇)

【語釈】

○詞書―へ内―本は「かんなりつほにてひとくあつまりてあきのよをしむうたよみけるつるでによめる」。○惜しみつる―底本傍書、へ禁―へ御―へ内―本は「おしとおもふ」。○いたづらに―無駄に。むなしく。○うし―

いやだ。気に入らない。憎らしい。

【通釈】

これほど惜しんでいる夜を、（寝ている人はもちろん、歌などを詠まず何もしないで）むなしく寝ないで明かしている人までもが嫌に思われることだ。

【類歌・参考】

延喜四年かみなりのつほにて

あくまでにごよひのつきをみつゝあらてねてあかすらむ人のこゝろよ

（躬恒集Ⅳ・二四八）

いらぬまにこむといひしかはこよひこそわれてをしけれなつのよのつき

（躬恒集Ⅳ・一〇九）

承暦二年内裏歌合に月をよめる

春宮大夫公実

くもりなきかげをとどめばやまのはにいたとも月ををしまざらまし

（金葉和歌集二・卷三・秋・一九二）

（355は〈西〉本に重出）

356

来ぬ人を待つ夕暮の秋風はいかに吹けばかわびしかるらん

【他出文献】

(題しらず)

(よみ人しらず)

こぬ人をまつゆふぐれの秋風はいかにふけばかわびしかるらむ

(古今和歌集・卷十五・恋五・七七七)

【語釈】

○秋風は―へ禁へ御へ本は「秋風に」。○いかに吹けばか―へ禁へ本は「いかになけはか」。

【通釈】

やって来ない人を待つ夕暮れの秋風は、どのように吹くからこんなになびしいのであろうか。

▽『古今集』では「よみ人しらず」の歌となっている。

【類歌・参考】

題しらず

ただみね

秋風にかきなすことのこゑにさへはかなく人のこひしかるらむ

(古今和歌集・卷十二・恋二・五八六)

題しらず

ともり

秋風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらむ

(古今和歌集・卷十五・恋五・七八七)

題しらず

小町

あきかぜにあふたのみこそかなしけれわが身むなしくなりぬと思へば

(古今和歌集・卷十五・恋五・八二二)

(357 は〈西〉本に重出)

358

水の面も見えず流るゝ紅葉葉はいつれの秋か色の変はらぬ

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○水の面も―水面。〈禁〉本「水のおもゝ」。〈御〉本「水の面も」。○いつれの秋か色の変はらぬ―どの秋に色が変わらないことがあるのか(ありはしない)。

【通釈】

水面も見えずに流れるもみじ葉は、どんな年の秋に色が変わらないことがあるのか(ありはしない)。

【類歌・参考】

天曆御時、ひむせさせたまひけるに

万代にかはらぬはなの色なれはいつれの秋か君か見さらむ

(実頼集・二)

きみかよをときはかきはといのりおけはいつれの秋もいろはかはらし

(重家集・一四四)

たつた河のほとりにてよめる

坂上これのり

もみぢばのながれざりせば竜田河水の秋をばたれかしらまし

(古今和歌集・卷五・秋下・三〇二)

(題しらず)

つらゆき

竜田河秋にしなれば山ちかみながるる水も紅葉しにけり

(後撰和歌集・卷七・秋下・四一四)

(359 はへ西へ本に重出)

360 萩の花見れば人のみ恋しくて折らぬに袖ぞ露けかりける

【他出文献】

ナシ

【語釈】



○露けかりける―露に濡れてしっとりしている。「涙に濡れている」の意が込められている。

【通釈】

萩の花を見るとあの人が恋しく思われて、萩の花を折らないのに袖がしっとり濡れることだ。

▽萩を見ると恋しい人のことばかりが思われて、自然と涙で袖が濡れてしまうの意。

【類歌・参考】

むかしあひしりて侍りける人の、秋ののにあひて物がたりしけるついでによめる　みつね

秋はぎのふるえにさける花見れば本の心はわすれざりけり　（古今和歌集・卷四・秋上・二二九）

（題しらず）　（よみ人しらず）

をりて見ばおちぞしぬべき秋はぎの枝もたわわにおけるしらつゆ　（古今和歌集・卷四・秋上・二二三）

題しらず　みつね

露けくてわが衣手はぬれぬとも折りてをゆかん秋はぎの花　（拾遺和歌集・卷三・秋・一八二）

いささめにいまもみがほしあきはぎのしなひにあるらむいもがすがたを　（万葉集・卷十・二二八四・作者未詳）

（361）371は（西）本に重出）

(372 は底本 227 と重出)

(373、382 は〔西〕本に重出)

383

いさ知らずみつねはここのありす川君がみゆきにけふこそは見れ  
ありす有栖河にて問はせ給ひしかば  
ありすがはに有栖川君が行幸に今日こそは見れ

【他出文献】

家集

躬恒

いさ知らずみつねはここのありす川君がみゆきにけふこそは見れ

(夫木和歌抄・卷六・春六・二二〇一)

【語釈】

○詞書―「問はせ給ひしかば」は〔禁〕本では「とはせたまひしことは」。○いさ知らず―さあ、どうでしょうか、よくわかりません。さあ、わかりません。○みつねは―「身常は」に「躬恒」を掛ける。○ここに―底本は「い」の。〔禁〕〔御〕本によって校訂する。○有栖川―山城国、今の京都市北区紫野、船岡の東麓に発して賀茂斎院の本院の近くを流れる川。「有栖川」に「在り」を掛ける。○君が行幸―延喜十八年十月十九日、醍醐天皇の北野への行幸。

【通釈】

有栖川でお尋ねになったので

さあ、存じません。我が身はいつもここ有栖川におります。あなた様の行幸を今日こそは拝見いたします。

▽帝から名前を尋ねられたのに対して、自分の名前を物名として詠み込んだ歌。

【類歌・参考】

ふなをかのみゆきの、ちはよるへなみしつむとわびし物思ひもなし

(躬恒集Ⅲ・一九三)

千代をへてみゆきあるへきふなをかまつならぬ身はおいそかなしき

(躬恒集Ⅲ・一九四)

おなしとし十月十九日ふなをかに行幸ありしときに御乳母の命婦まへにめしてもみちををりてたてまつれと

あり、ひとえたをりてこのうたをむすひつけてたてまつる

けふのひのさして、らせはふなをかのもみちはいと、あかくそありける

(躬恒集Ⅳ・一九二)

家集、北野行幸に本院の辺にて詠む

躬恒

おとに聞くいつきの宮のありす河ただふなをかのをたりなりけり (夫木和歌抄・卷二十四・雑六・一一二〇〇)

(384 は底本 40 と重出)

(385 〱 643 は 〱西〱 本に重出)

以下、底本は書陵部蔵(501・235)、禁裏本とする。

歌番号は『校本凡河内躬恒全歌集と総索引』に拠り、歌番号の下に括弧で括って、禁裏本の歌番号を示した。

644(84) 五月雨の玉に抜く日をあやめ草ねにあらはれて泣きぬべらなり

### 【他出文献】

五月雨の玉にぬくひのあやめ草ねにあらはれてなきぬべらなり

(古今和歌六帖・第一・一〇二)

### 【語釈】

○五月雨―底本は「五月」。〈御〉〈内〉本によって校訂する。「五月雨」に「さ乱れ」を掛ける。○玉にぬく―五月五日に、沈香、丁子などの薬を玉にして錦の袋に入れ、菖蒲や蓬などの造花に結びつけ、五色の糸を飾って長く垂らすこと。○あやめ草―ここまでが「ねにあらはれて」を導く序詞。○ねにあらはれて―「根に洗はれて」と「音に表れて」を掛ける。

### 【通釈】

(五月雨が乱れた玉のように降る五月五日に、薬玉にするあやめ草の根が洗われる)その「ねにあらわれて」という言葉通り、声に出して泣いてしまいたいそうだ。

【類歌・参考】

(題しらず)

よみ人しらず

風ふけば浪打つ岸の松なれやねにあらはれてなきぬべらなり

(古今和歌集・卷十三・恋三・六七二)

文治のころ、百首歌よみ侍りけるに

前中納言定家

浦風やとはにのみこすはま松のねにあらはれてなく千鳥かな

(続後撰和歌集・卷八・冬・四九四)

題しらず

法印頼舜

おもひ河いはもとすげをこす浪のねにあらはれてぬる袖かな

(続千載和歌集・卷十一・恋一・一一三八)

題しらず

源師光

ほととぎすこゑなをしみそあやめぐさたまにぬくひをけふとしらずや

(万代集・卷三・夏・六二三)

大伴家持雲雀公鳥歌一首

ほととぎすまてどきなかずあやめぐさたまにぬくひをいまだとほみか

(万葉集・卷八・一四九四)

645  
(85)

さ夜<sup>よ</sup>ふけて鳴<sup>な</sup>くものにもか郭公<sup>よぶか</sup>夜<sup>よ</sup>深く鳴<sup>な</sup>きていづちなるらん

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○ものにもか―「もか」は詠嘆を表わす助詞「も」と疑問を表わす助詞「か」。〈御〉本は「ものにかは」。○夜深く―夜遅く。

【通釈】

夜が更けて鳴くものなのか。郭公はこんなに夜遅く鳴いてどこにいるのだろう。

【類歌・参考】

いせのうみのあまのしまつがあはびたまとりてのちもかこひのしげけむ (万葉集・卷七・一三二六・作者未詳)

やまとのうだのまはにのさにつかばそこもかひとのわをことなさむ (万葉集・卷七・一三八〇・作者未詳)

寛平御時きさいの宮の歌合のうた 紀とものり

五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ (古今和歌集・卷三・夏・一五二)

題しらず たちばなのゆきより

池水や氷とくらむあしがもの夜ぶかくこゑのさわくなるかな (拾遺和歌集・卷四・冬・一三三一)

646  
(148)

わびぬれば今は<sup>いま</sup>とものを思<sup>おも</sup>へども心<sup>こころ</sup>に似ぬは<sup>なみだ</sup>涙なりけり

【他出文献】

(題しらず)

躬恒

わびぬればいまはとものをおもへども心しらぬはなみだなりけり

(新勅撰和歌集・卷十四・恋四・八八四)

【語釈】

○今はとー今はこれまでと。○心に似ぬはー思い通りにならないのは。〈内〉本「こゝろしらぬは」。

【通釈】

あの人を思い続けてどうにもならない状態になってしまったので、今はあの人への思いを断ち切ろうと思ひ悩むのだが、思い通りにならないのは涙であることよ。

【類歌・参考】

(題不知)

(読人不知)

わびぬればしひてわすれんとおもへどもこころよわくもおつるなみだか

(詞花和歌集・卷七・恋上・二〇三)

題しらず

道因法師

おもひわびてさても命はあるものをうきにたへぬは涙なりけり

(千載和歌集・卷十三・恋三・八一八)

恋五十番歌合に

従三位為子

待ちよわりいまはと思ひなるほどよかねより後に鳥も声して

(玉葉和歌集・卷十・恋二・一四二一)

謙徳公のもとにつかはしける

読人しらず

わすれなんいまはと思ふ時にこそありしにまさる物おもひはすれ

(玉葉和歌集・卷十・恋二・一六七七)

647  
(149)

朱雀院の女郎花合をみなへしあはせに

妻恋つまこふる鹿しかぞ鳴なくなる女郎花おのが住すむ野のの花はなと知しらずや

【他出文献】

朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける

みつね

つまこふるしかぞなくなる女郎花おのがすむの花としらずや

(古今和歌集・卷四・秋上・二三三三)

左

躬恒

妻恋ふる鹿ぞなくなる女郎花おのが住む野の花としらずや

(某年秋朱雀院女郎花合・一)

つまこふるしかぞ鳴くなる女郎花おのがすむの花としらずや

(古今和歌六帖・第六・三六七五)



【語釈】

○おのが住む野―「おのが」は「自分の」の意。○花と知らずや―〈歌〉本は「はなにはあらずや」。

【通釈】

朱雀院の女郎花合に詠出した歌

妻を恋しがる鹿が鳴いているようだ。女郎花が自分の住んでいる野の花と知らないのだろうか。

▽女郎花を女性に見なした歌。

【類歌・参考】

野鹿といへることを

藤原雅家朝臣

名にめでて妻や恋ふらむ女郎花おほかる野べのさを鹿の声

(新拾遺和歌集・卷五・秋下・四六八)

野にまかりて、をみなへしををりて

をみなへし折りてかへらばおなじ野にすむらん鹿やつまごひにせん

(隣女集・卷二・秋・四六〇)

鹿

をみなへしおほかる野べにたつ鹿のなにをあかずと妻をこふらん

(隣女集・卷二・秋・四七五)

鹿

をみなへしおほかるのべに鳴く鹿はいかなるくさのつまをこふらん

(隣女集・卷四・秋・二〇三九)

女郎花

おのがつま思ひなしてやをみなへし露けき野べに鹿はふすらん

(為兼鹿百首・三八)

648  
(150)

女郎花吹き過ぎをみなへして来る秋風は目めにこそ見えみね香かこそしるけれ

【他出文献】

(朱雀院のをみなへしあはせによみてたてまつりける) 躬恒

女郎花ふき過ぎてくる秋風は目には見えねどかこそしるけれ

(古今和歌集・卷四・秋上・二三四)

女郎花ふき過ぎてくる秋風は目には見えねどかこそしるけれ

(古今和歌六帖・第六・三六七四)

あきかぜにふき過ぎてくるをみなへしめには見えねどかぜのしきれる

(新撰万葉集・卷下・五二〇)

左 躬恒

女郎花吹き過ぎて来る秋風は眼には見えねど香こそしるけれ

(昌泰元年秋亭子院女郎花合・十五)

【語釈】

○秋風は―底本「むさしのは」。底本傍書によって校訂する。

【通釈】

女郎花を吹き過ぎてくる秋風は、目には見えないが香りははっきりしていることだ。

【類歌・参考】

題しらず

(よみ人しらず)

秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えずとおとのさやけさ

(古今和歌集・卷四・秋上・二二七)

返し

伊勢

めにみえぬ風に心をたぐへつつやらば霞のわかれこそせめ

(後撰和歌集・卷十三・恋五・九三〇)

齋宮女御いまだまゐり侍らざりけるとき、さくらにつけてつかはさせ給うける

天曆御製

吹く風の音にききつつさくら花めには見えずも過ぐる春かな

(玉葉和歌集・卷九・恋一・一二五〇)

延喜御時の菊宴歌

藤原後蔭朝臣

はつしもとひとついろにはみゆれどもかこそしるけれしらぎくのはな

(続古今和歌集・卷五・秋下・四九七)

649  
(152)

心<sup>こころ</sup>あてに折<sup>お</sup>らばや折<sup>お</sup>らん初霜の置<sup>を</sup>きまどはせる白菊<sup>しらぎく</sup>の花

【他出文献】

しらぎくの花をよめる

凡河内みつね

心あてにをらばやをらむはつしものおきまどはせる白菊の花

(古今和歌集・卷四・秋上・二七七)

心あてにをらばやをらむ初霜のおきまどはせる白菊の花

(新撰和歌・卷一・春秋・一〇〇)

心あてにをらばやをらんはつしものおきまどはせる白ぎくの花

(古今和歌六帖・第六・二七四四)

### 【語釈】

○詞書―へ内〳本は「しらきくのはなをよめる」。○心あてに―当て推量に。当てずっぽうに。

○置き―へ内〳本は「おき」。○まどはせる―わからなくさせる。

### 【通釈】

折るならば、当て推量に折ってみよう。初霜が置いてわからなくさせている白菊の花を。

### 【類歌・参考】

月夜に梅花ををりてと人のいひければ、をるとてよめる

みつね

月夜にはそれとも見えず梅花かをたづねてぞしるべかりける

(古今和歌集・卷一・春上・四〇)

月のおもしろかりけるをみて

みつね

ひるなれや見ぞまがへつる月影をけふとやいはむきのふとやいはん

(後撰和歌集・卷十五・雑一・一一〇〇)

すにをれはいさこのいろにまかふとりてにとるはかりなれにけるかな

(躬恒集I・四七)

九月

いつれをか花とはわかん長月のあり明けの月にまかふしらすく

(貫之集 I・一〇二)

650  
(156)

ふるさと ふるさと 霞 かすみと 飛び わ 分け く 来る かり 雁 たひ は そら 旅 は の は 空 はる に す や す 春 す を す 過 す ぐ す ら す む

【他出文献】

題しらず

よみ人しらず

ふるさとの霞とびわけゆくかりはたびのそらにやはるをくらさむ

(拾遺和歌集・卷一・春・五六)

ふるさとにかすみとび分け行く雁はたびの空にやはるを過ぐらん

(古今和歌六帖・第六・四三七一)

故郷に霞とびわけゆく雁は旅のそらにや春を過ぐさむ

(延喜十三年三月十三日亭子院歌合・十九)

【語釈】

○来る—ここでは「行く」の意。〈歌〉本は「いく」。○春を—〈甲〉本は「はるは」。○過ぐらむ—〈乙〉本は「すくやむ」。

【通釈】

故郷に霞を分けて飛んで帰って行く雁は、旅の空で春を過ごすのだろうか。

【類歌・参考】

かりのこゑをききてこしへまかりにける人を思ひてよめる

凡河内みつね

春くればかりかへるなり白雲のみちゆきぶりにことやつてまし

(古今和歌集・卷一・春上・三〇)

帰雁をよめる

伊勢

はるがすみたつを見すててゆくかりは花なきさとにすみやならへる

(古今和歌集・卷一・春上・三一)

かへるかりをききて

よみ人しらず

帰る雁雲ちにまどふ声すなり霞ふきとけこのめはる風

(後撰和歌集・卷二・春中・六〇)

題しらず

よみ人しらず

見れどあかぬ花のさかりに帰る雁猶ふるさとのはるやこひしき

(拾遺和歌集・卷一・春・五五)

651  
(218)

忠岑 これひら 伊衡 これひら 問ひ答ふ とこた

白露は上より置くをいかなれば萩の下葉のまづもみづらん しらつゆ うへを はぎ したば

【他出文献】

みつねただみねにとひ侍りける

参議伊衡

白露はうへよりおくをいかなれば萩のしたばのまづもみづらん

(捨遺和歌集・卷九・雑下・五二三)

躬恒忠岑等にとひはべりける

伊衡朝臣

白露はうへよりおくをいかなればはぎのした葉のまつもみづらん

(捨遺抄・卷九・雑上・四〇八)

又

しらつゆはうへよりをけといかなれば萩のした葉の先もみつらん

(忠岑集Ⅲ・一四七)

又た、みねとふ

しらつゆはうへよりおくをいかなればはぎのしたはのまつもみつらん

(忠岑集Ⅳ・一二三)

### 【語釈】

○詞書―壬生忠岑は生没年未詳、六位、左近衛番長を経て、長く右衛門府生に任じ、撰津権大目に至る。藤原伊衡は藤原敏行の男。貞観十八年(八七六)生、天慶元年(九三八)十二月十七日没。六三歳。承平四年(九三四)参議。へ内へ本は「みつねた、みねにとひはへりけるさんきこれひら」。○白露―へ御へ本は「しらゆき」。○下葉―草木の下の方にある葉。○もみづ―紅葉する。

### 【通釈】

忠岑と伊衡が尋ね答える

白露は上から置くのにどうして萩の下葉が先に紅葉するのだろうか。

▽『捨遺集』の詞書の方が詠歌状況を正確に反映しているか。

【類歌・参考】

くものうへになきつるかりのさむきなへはぎのしたばはうつろはむかも (万葉集・卷八・一五七九・作者未詳)

わがやどのはぎのしたばはあきかぜもいまだふかねばかくぞもみてる (万葉集・卷八・一六三二・大伴家持)

このころのあかつきつゆにわがやどのはぎのしたばはいろづきにけり (万葉集・卷十・二二八六・作者未詳)

あきかぜのひにけにふけばつゆおもみはぎのしたばはいろづきにけり (万葉集・卷十・二二〇八・作者未詳)

あひしりて侍りける女のあだなたちて侍りければ、ひさしくとぶらはざりけり、八月ばかりに女のもとより

などかいとつれなきといひおこせて侍りければ よみ人しらず

白露のうへはつれなくおきみつ萩のしたばの色をこそ見れ (後撰和歌集・卷六・秋中・二八五)

652  
(219)

さを鹿しかのしがらみ伏ふする萩はぎなれば下葉したばや上うへになりかへるらむ

【他出文献】

こたふ

みつね

さをしかのしがらみふする秋萩はしたばやうへになりかへるらん (拾遺和歌集・卷九・雑下・五二四)

こたふ

みつね



さをしかのしがらみふする萩なればしたばやうへに成りかへるらん

(拾遺抄・卷九・雑上・四〇九)

さをしかのしがらみふする秋はぎはしたばやうへになり帰るらん

(古今和歌六帖・第六・三六五二)

小男鹿のしからみふする秋萩はした葉やうへになりかへるらん

(忠岑集Ⅲ・一四九)

みつねこたふ

さをしかのしからみふするはきなればしたはやうへになりかへるらん

(忠岑集Ⅳ・一二四)

【語釈】

○詞書―へ歌―本は「これひらのあそむのとひこたふうた」。へ内―本は「こたふ」。○さを鹿―雄の鹿。○しがらみ伏する―からめつけて横になる。○萩なれば―へ歌―へ内―本は「あきはきは」。○なりかへる―ひっくり返る。裏返る。へ内―本は「なりかはる」。

【通釈】

雄の鹿がからめつけて横になる萩なので、下葉が上にひっくり返るのであろう。

【類歌・参考】

題しらず

よみ人しらず

秋はぎをしがらみふせてなくしかのめには見えなくておとのさやけさ

(古今和歌集・卷四・秋上・二二七)

土御門右大臣家歌合によみはべりける

源為善朝臣

あきはぎをしがらみふするしかのねをねたきものからまづぞききつる (後拾遺和歌集・卷四・秋上・二八五)

堀河院御時、百首歌中にはぎをよみ侍りける 前中納言匡房

河水にしかのしがらみかけてけりうきてながれぬ秋萩の花 (新古今和歌集・卷四・秋上・三二八)

653 (220)

忠岑答ふ  
あきはぎ  
秋萩は先づ刺す枝より移ろふを露の心のわけるとな見そ

【他出文献】

(こたふ) たゞみね

秋はぎはまづさすえよりうつろふをつゆのわくとは思はざらなむ (拾遺和歌集・卷九・雑下・五一五)

(こたふ) ただみね

秋はぎはまづさすはよりうつろふを露のわくとは思はざらなん (拾遺抄・卷九・雑上・四一〇)

あき萩はまつさく枝よりいろつくをつゆのこゝろのわくるとな見そ (忠岑集Ⅲ・九一)

かへし

あき萩はまつさすはよりいろつくを露のこゝろのわくるとな見そ (忠岑集Ⅲ・一四八)

忠岑答ふ

あきはきはまつさすえよりいろつくをつゆのわくとはおもはさらなん

(忠岑集Ⅳ・一二五)

### 【語釈】

○詞書―へ内∨本は「たゞみね」。 ○刺す枝―伸びる枝。へ乙∨本は「さすは」。 ○わけるとな見そ―底本は「わけるとそ見る」。654番歌との照応関係より底本傍書、へ乙∨本により校訂する。「わけるとは」は四段活用の他動詞で「區別する」を意味する「わく」の已然形＋完了の助動詞「り」の連体形。へ内∨本は「わくとはおもはさら南」。

### 【通釈】

忠岑が答える

秋萩はまつ先に伸びる枝から色づくので、露の心が區別すると見ないでください。

### 【類歌・参考】

これさだのみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

白露の色はひとつをいかにして秋のこのはをちぢにそむらむ

(古今和歌集・卷五・秋下・二五七)

(これさだのみこの家の歌合によめる)

壬生忠岑

秋の夜のつゆをばつゆとおきながらかりの涙やのべをそむらむ

(古今和歌集・卷五・秋下・二五八)

題しらず

よみ人しらず

あきのつゆいろいろごとにおけばこそ山のこのはのちくさなるらめ

(古今和歌集・卷五・秋下・二五九)

もる山のほとりにてよめる

つらゆき

しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり

(古今和歌集・卷五・秋下・二六〇)

654  
(221)

これひらたみね 伊衡忠岑が答へを

もとは 本葉より移る心うつつを言ふこころからにいへかへすべき言ことのなきかな

【他出文献】

ナシ

【語釈】

○詞書―へ御へ本は「これひらた、みねこたへを」。○本葉―茎または幹の、根に近いほうにある葉。○いへかへす―「いひかへす」の誤りか。

【通釈】

伊衡が忠岑の答えを

根元の葉から色変わりする趣旨を言うので、言い返すことのできる言葉のないことよ。

【類歌・参考】

(略) はたすすき もとはもそよに あきかぜの ふきくるよひに (略) (万葉集・卷十・二〇九三・作者未詳)  
さよふけてしぐれなふりそあきはぎのものはのみちちらまくをしも (万葉集・卷十・二二一九・作者未詳)

655  
(222)

躬恒が答へを

千年経る松の緑の移ろふも誰がしがらみにかけて伏するぞ

【他出文献】

又とふ

これひら

ちとせふる松のしたばのいろづくはたがしたかみにかけてかへすぞ

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五一六)

みつね

ちとせふるまつのしたはのも、ちるはたかしからみにかけてかへすぞ

(忠岑集Ⅳ・一二七)

【語釈】

○緑の移ろふも―へ底〱本は「みとりのうつろふと」。へ御〱本によって校訂した。へ内〱本は「してはの〇うつろふは」。へ乙〱本は「みとりのうつろへは」。○誰がしがらみに―へ内〱本は「たかしたかみに」。へ乙〱本は「たかしかかみに」。○伏するぞ―へ内〱本は「かへすぞ」。

## 【通釈】

躬恒の答えを

千年を過ごす松の緑が色変わりするのも、誰がからみつけて横になるからなのか。

▽伊衡が躬恒に問うたのであろう。

## 【類歌・参考】

(女の許につかはしける)

よみ人しらず

したもみぢするをばしらで松の木のうちへの緑をたのみけるかな

(拾遺和歌集・卷十三・恋三・八四四)

(その御屏風のうた、ところくのたいのおもむきにしたかへり)

よみ人しらず

むらさきの色しこければ藤の花松のみとりもうつろひにけり

(躬恒集V・二七九)

656  
(223)

躬恒答ふ

松といへど千々の秋にし逢ひぬればしのびに移る下葉なりけり

【他出文献】

こたふ

みつね

松といへどちとせの秋にあひくればしのびにおつるしたばなりけり  
まつといへどちのあきにしあひぬればしのひにうつるしたはなりけり

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五一七)  
(忠岑集Ⅲ・一二七)

【語釈】

○詞書―へ内∠本は「こたふ」。○松といへど―へ乙∠本は「まつといへは」。○千々の秋にし逢ひぬれば―へ内∠  
本は「ちよのあきにあひくれは」。○しのびに移る―へ内∠本は「しのひにおつる」。

【通釈】

躬恒が答える

松と言つても多くの秋に逢つたので、ひそかに色付く下葉なのだなあ。

【類歌・参考】

これさだのみこの家の歌合によめる

大江千里

月見ればちぢに物こそかなしけれわが身ひとつのあきにはあらねど

(古今和歌集・卷四・秋上・一九三)

これさだのみこの家の歌合によめる

としゆきの朝臣

しらつゆも時雨もいたくもる山はしたばのこらず色づきにけり

(古今和歌集・卷五・秋下・二五七)

657  
(224)

これひらこた  
伊衡答ふ

白妙しろたへの白しろき月をも紅くれなゐの色をもなどかあかしと言いふらん

【他出文献】

又とふ

これひら

白妙のしろき月をも紅の色をもなどかあかしといふらん

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五一八)

これひらとふ

しろたへにしろき月をもくれなゐのいろをもなどかあかしといふらん

(忠岑集Ⅳ・一二六)

【語釈】

○詞書―へ内∨本は「またとふ」。○白妙の―「白」を導く枕詞。○あかし―「明かし」と「赤し」を掛ける。

【通釈】

伊衡が答える

白い月も紅の色も、どうして「あかし」と言うのだろう。

▽詞書は「伊衡が問う」という形の方がふさわしい。



【類歌・参考】

貧窮問答歌一首并短歌

(略) あめつちは ひろしといへど あがためは さくやなりぬる ひつきは あかしといへど あがためは てりやたまはぬ (略)

月をよめる

在原元方

秋の夜の月のひかりしあかければくらぶの山もこえぬべらなり

(古今和歌集・卷四・秋上・一九五)

土御門右大臣家に歌合し侍けるに、秋の月をよめる

源為善朝臣

おほぞらの月のひかりしあかければまきのいたども秋はさされず

(後拾遺和歌集・卷四・秋上・二五二)

658

昔より言ひしきにける事なれば我らはいかゞ今はさだめん

答ふ

躬恒

【語釈】

○言ひしきにける―「言ひしく」は、「言頻く」か。いいならわしてきた。○いかゞ―へ内へ本は「いかに」。

【通釈】

答える

躬恒

昔から言いならわしてきた事なので、我らはどうして今定める事ができましようか。

▽この歌は底本にはないが『捨遺集』より補う。

【類歌・参考】

いまさらになにかうらみむうきときといひしきにける春のあけほの

(宗尊Ⅱ・柳葉和歌集・七)

円融院のうへ、うぐひすとほととぎすといずれかまさると申せとおほせられければ

大納言朝光

折からにいづれともなき鳥のねもいかがさだめむ時ならぬ身は

(捨遺和歌集・卷九・雑下・五二二)

た、みね

あきゝりはた、ぬをりありはれもせぬふりなんなをはいか、さためん

(忠岑集Ⅳ・一〇七)

659  
(225)

くれないなゐ  
忠岑答ふ

紅くれないなゐに照てる日いろの色いろにたとふれば月ひかりの光ひかりもいかゞ答こたへん

【他出文献】

た、みねこたふ

くれなるをてる日のいろにくらふれは月の心もいか、はなれん

(忠岑集IV・一二九)

【語釈】

○紅に―へ乙〽本は「くれなるを」。

【通釈】

忠岑が答える

照る太陽の色を紅に例えるので、月の光もどのように答えましょう。

▽太陽の光を紅と言うからには、月の光も紅とすることができないのではないか。

【類歌・参考】

晩見躑躅といへることをよめる

撰政家参河

いりひさすゆくれなるのいろはえて山したてらすいはつつじかな

(金葉和歌集二・卷一・春・八〇)

(花の歌の中に)

雅成親王

紅のうす花ぞめの山ざくら夕日うつろふ雲かとぞ見る

(続拾遺和歌集・卷一・春上・六四)

花御歌の中に

龜山院御製

山のはにiri日うつろふ紅のうす花ざくら色ぞことなる

(玉葉和歌集・卷二・春下・二〇三)

龜山殿七百首歌に、庭瞿麦を

侍従為親

紅の色こそまされ夕附日さすやかきねのやまとなでしこ

(新統古今和歌集・卷十七・雑上・一六八二)

660  
(226)

影暮れて光なき夜も衣縫ふ糸をもなどかよると言ふらん

これひらこた  
伊衡答ふ

【他出文献】

又とふ

これひら

かげ見ればひかりなきをも衣ぬふいとをもなどかよるといふらん

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五二〇)

これひら

かげ暮れてひかりなきをもちろもぬふいとをもよるといふぞあやしき

(忠岑集Ⅲ・一三〇)

【語釈】

○詞書「へ内」本は「またとふ」。○影くれて「影」は、太陽や灯火のような光そのものを示す。「へ内」本は、「かけみれは」。○光なき夜も「へ内」本は「光なきよを」。○よる「縊る」と「夜」を掛ける。

【通釈】

伊衡が答える

日が暮れて光のない夜も衣を縫う糸もどうして「よる」と言うのだろうか。

▽詞書は「伊衡が問う」という形の方がふさわしい。

【類歌・参考】

(歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる)

つらゆき

あおやぎのいとよりかくる春しもぞみだれて花のほころびにける

(古今和歌集・卷一・春・二六)

西大寺のほとりの柳をよめる

僧正遍昭

あさみどりいとよりかけてしらつゆをたまにもぬける春の柳か

(古今和歌集・卷一・春・二七)

あづまへまかりける時みちにてよめる

みつね

いとよる物ならなくにわかれちの心ほそくもおもほゆるかな

(古今和歌集・卷九・羈旅・四一五)

返し

おほきおほいまうちぎみ

しらかはのたきのいとなみだれつつよるをぞ人はまつといふなる

(後撰和歌集・卷十五・雑一・一〇八七)

661  
(227)

躬恒答ふ

むば玉の夜は恋しき人に逢ひて糸をもくれば逢ふとやは見ぬ

【他出文献】

こたふ

みつね

むばたまのよるはこひしき人にあひていとをもよればあふとやは見ぬ

(拾遺和歌集・卷九・雑下・五二二)

【語釈】

○むば玉の―「夜」を導く枕詞。○糸をもくれば―「くれば」は「繰れば」と「来れば」を掛けるか。〈内〉本は「いとをもよれば」。

【通釈】

躬恒が答える

夜は恋しい人に逢って、糸も繰る（恋しい人が来る）ので、逢うと見ないことがあるのか。

▽人に逢うのは「夜」だし、糸も「繰る（来る）」というから、逢う点で共通するので、共に「よる」というの  
だろう。

【類歌・参考】

女につかはしける

三条右大臣

名にしおはば相坂山のさねかつら人にしられでくるよしもがな  
みだれ糸のつかさひとつになりてしもくることなど絶えにたるらむ

(後撰和歌集・卷十一・恋三・七〇〇)  
(蜻蛉日記・上卷・章明親王)

662  
(228)

忠岑答ふ

暮れ果てばまた日も見えぬ片糸の逢ふをばよると思ふばかりぞ

【他出文献】

た、みね

くれたてはまつ人もきぬかたいとのあふをはよるといふはかりなり

(忠岑集IV・一三一)

【語釈】

○暮れ果てば―すっかり暮れてしまったら。へ乙本は「くれたては」。○また日も見えぬ―再び日も見えない。  
○片糸の―「より合わせる前の、片方の細糸」の意を表すと同時に、「(男女が)逢う」を導く枕詞として機能する。○よる―「夜」と「搓る」を掛ける。

【通釈】

忠岑が答える

すっかり暮れてしまつたら再び日も見えない。片糸が合うのを繕る、男女が逢うのを夜と思うばかりだ。

【類歌・参考】

右衛門督為家、百首歌よませ侍りけるこひのうた

下野

かたいとのあはずはさてやたえなましちぎりぞ人のながきたまのを (新勅撰和歌集・卷十五・恋五・一〇〇七)

(久恋)

源家長朝臣

かたいとのあひ見むまでと年もへぬつれなき人をたまのをにして

(続後撰和歌集・卷十二・恋二・七二四)

嘉元百首歌たてまつりけるに、おなじ心を

後二条権大納言典

かた糸のあはずはなげのあはれだにせめてはかけよ玉の緒にせむ

(玉葉和歌集・卷九・恋一・一三〇五)

663  
(229)

片糸かたいとのひとすぢこたにのみ答こたふればふたみちかけて問とふかひもなし  
伊衡答これひらこたふ

【他出文献】

ナシ



【語釈】

○片糸のひとすぢにのみ―片糸のように一方のみで。○ふたみちかけて―二つをかけて。

【通釈】

片糸のように一方のみで答えるので、二つをかけて問うかいもない。

▽伊衡がなぜこのように答えたか不審。662の「片糸の」が「逢ふ」を導く枕詞と理解しなかったか。

【類歌・参考】

(題読人不知)

こりつむるなげきをいかにせよとてかきみにあふごのひとすぢもなし (金葉和歌集二・卷八・恋下・四九四)

(恋歌の中に)

順徳院御製

ひとすぢにうきになしてもたのまれずかはるにやすき人のこころは (続後撰和歌集・卷十四・恋四・八六八)

(述懐心を)

正三位成美

ひとすぢに思ひさだむる心だにあらばうき世をなげかざらまし (続後撰和歌集・卷十七・雑中・一一五九)

(とほくなりたまふほとちかくて、おなし宮に)

すきにしもいまゆくすゑもふたみちになへてわかれのなきよなりせは (齋宮女御集Ⅱ・一七四)